

第2章 天保8年の「宮崎札」の発行

1. 発行の経過と札の種類

『歴代記類』天保8年（1837）10月朔日の条によれば、弘前藩の御元方田^{おんもとかた}中勝衛^{かつえ}によって「預り手形」の通用が提唱されたことにより、高5分、1文目、7文目、14文目、25文目の手形が発行されて、領内の米穀は弘前藩が一手に買い上げるようになったという。また「藩庁日記」天保8年10月晦日条によれば、この預り手形発行の責任主体として、「御元方御用達」が命じられ、「北御蔵拼頭 竹内勘六」「亀子御蔵拼頭 宮崎八十吉」「石渡御蔵拼頭 宮崎新太郎」の3名がそれに任じられた（拼頭とは、「からがきがしら」と読む。「からがく」とは、束ねるという意味）。「亀子御蔵拼頭 宮崎八十吉」こそが、「宮崎札」の名称のもとになった人物である。

宮崎札は、果たして単なる預り手形に過ぎないのか、それとも藩札と呼んでもよい性格のものなのか、大いに問題となるところであるが、それを知る上で参考となるのが、次の「藩庁日記」天保8年10月5日の条である。

為融通来春御払米之御入金迄之内、前々通用致来候御用達手形ヲ以正金銭に入交、正金銭同様致通用候様被仰付候間、何れも難有奉存、致通用候様（下略）、

ここに見えるように、藩庁は御用達手形を正金銭に交えて同等に領内で通用させるように命じているのであって、時期ははっきりしないが、この時点以前から御用達手形は通用していたと考えられる。すなわち札遣い^{さつづか}の開始が明らかになっていると見て支障なからう。

それはともかく藩が農民より米穀を買い上げて、その代金を「来春御入金」

するまで御用達商人に代払いさせるのが最も好ましい方法であったが、それでは藩が御用達商人から正金銭を借り上げるのと同じことになるので、やむを得ず預り手形で買い上げ米の支払いが行われたのであった。10月朔日を期して実施される米穀の買い上げに際して、9月中にその代金を預り手形で支払うことが決定され準備されたが、同月末に至り預り手形を紙幣化したいという元締め意見が提出されて、札遣いへと方針が変更になったと考えられる。つまり当初弘前藩では、米穀買い上げに当たり御用達商人の預り手形の利用を考えていたに過ぎなかったものが、御用達商人達の進言によって所謂藩札の発行へ転換したのであった。

前述の『歴代記類』の記事によれば、宮崎札は5種類とされ、「藩庁日記」天保8年11月25日の条には、御用達の預り手形は4通あるが、これでは少額取り引きに困難を生じる向きもあるので、以後「三文目預」、「二文目預」、「五分預」の3種類を加えることにしたとある。上の記事によれば、「五分預」の札は当初なかったようであり、したがって11月の時点では当初の4種類の他に3種が加わって計7種類の札が通用するようになったと見られる。さらに同日記12月22日の条によれば、「拾文目手形」「拾五目手形」「貳拾目手形」の通用が認められて、計10種類の札が発行されることになったのである。

しかし現存する宮崎札の種類を鑑みるに、14文目札は見当たらず、初めに発行された4種とは、1文目、5文目、7文目、28文目の各札であり、これに5分、2文目、3文目、10文目、15文目、20文目札の6種類が加わって、計10種類の札が発行されたものと考えたい。なお宮崎札については、本章末の実物を複写したものを参照されたい。

2. 通用の実態と発行の動機

「藩庁日記」天保8年（1837）12月11日・16日・20日の条によれば、元締め御用達商人達より、「御用達預通用手形」は、藩庁が責任をもって発行してほしい旨の願い出が提出された。次いで東長町片谷清次郎本店で取り扱っていた預り手形を、「古学校」の長屋を役所として製造すると決定したことにより、すべての手続きが藩庁の統制のもとに行われることになった。しかし、このように御用達商人の手をほとんど離れたのにもかかわらず、実際に正金銭と交えて同様に通用することが定められていることからすれば、本質的には他藩で発行された藩札と全く変わらないものであることが窺える。しかしそれにもかかわらず、預り手形と称したのは、いかなる理由に基づくのであろうか。さらに藩札と称さず、「宮崎札」と称した理由もここで検討しなくてはならない。

さて第1の問題であるが、藩札と称さずに預り手形としたのは、おそらく次の2つの理由が考えられる。それは、あくまでも弘前藩では富裕な御用達商人達の保証する預り手形であるという体裁をとって、この札の信用を維持しようとし、領内の金融の円滑化を図ろうとしたのであろう。前章の「標符」発行による経済・流通の大混乱が領民へ大きな損害を与えたことが、宝暦改革から80年を経過した天保期にあっても人々の記憶に残っていたことは他の史料にも見える。藩庁の発行する藩札がいかに信用の置けないものであるかが、人々に確実に焼き付いている限り、弘前藩が前面に出て発行する藩札は、当初から通用が困難であることが推測されるのである。表面的にはどこまでも御用達商人の預り手形であることが、通用させるための大きな要因であったのである。

次に、当時の幕府の姿勢も視野に入れておく必要がある。幕府は天保7年12月の触書において、金銀銭札のほか米札など、その他の札遣いまでも厳しく制限しており、それに対する処罰までを想定した強硬な態度をとっていた。このような幕府の姿勢に鑑みて、弘前藩でも翌年に発行した「宮崎札」を藩札と称するには大いに躊躇したものと思われ、窮余の策として預り手形という形式を採用せざるを得なかったのであろう。宮崎札の命名の大きな歴史的背景は上記のようなものであるが、宮崎八十吉の姓がなぜ預り手形に記されたのか、その理由は判然としない。宮崎札通用失敗の責任についても同人が追及を免れているのを見れば、彼は預り手形の発行と通用の実質責任者でもなかった可能性が高い。発行人すら責任を負う立場にないという、その点にも、このたびの預り手形発行の大きな欺瞞性が潜んでいるのである。

「藩庁日記」天保8年10月5日の条は、宮崎札発行の動機について次のように説明している。すなわち、最近の凶作続きのために他国より大量の食料を購入したことから、多くの金銀が領外へ流出してしまい、両都（大坂・江戸）へ廻米して金銭を獲得すべき米もないこと、藩主の江戸在勤に必要な金を払米代金のなかから江戸へ送ることができなかったこと、ならびに凶作等による領外市場への城米の移出が不振となり、多くの金銀を獲得できず、領内での貨幣が著しく不足し、融通が閉塞して領民が困窮したことから、それを円滑にするために札遣いを開始したとある。

周知のごとく天保4年（1833）から同7年にかけての大凶作において発生した飢饉は、前後数年を含めて「七年飢渴（けち）」とも呼ばれ、とりわけ東北地方の被害は甚大であった。弘前藩も例外ではなく、藩庁は飢饉による窮民の救済に奔走し、救済米の購入を図らなくてはならなかった。弘前藩は米2万6千俵を四国・九州から買い入れたというが、そのために莫大な費用

を要したことは言うまでもない。前記天保8年（1837）10月5日の「藩庁日記」の条に見える記事は、以上のことから信用できるものと思われる。しかし金融の融通が閉塞したのは、この天保飢饉以前からのことであるので、米穀の他国からの移入は預り手形発行の直接的な理由にはならないであろう。

そこで問題となるのは、「藩庁日記」天保9年4月晦日の条に見える次の記述である。同年に、幕府巡見使が下向する予定であることから、「御米金共莫大之御入用御目当無之」の状況下にあって、他に特段の財政的な手当ても講じることはできないので、「御郡内預手形」を通用させることになったとある。すなわち天保9年は、巡見使下向の年に当たっていたので、その費用を賄うために預り手形を発行・通用させたというものであった。天保4年からの飢饉による窮民救済のための米穀購入、幕府巡見使の下向による財政支出の増加、つまり藩財政の逼迫と金融の閉塞状況を打破しようとして、預り手形の発行と通用が図られたのであった。

なお藩財政の逼迫とともに藩士財政も困難に直面しており、天保4年より、藩士は家禄を召し上げられて一律に4合扶持と家禄に応じた菜銭（食料費）^{さいせん}を支給されるシステムに変更された。したがって藩士は弘前藩では借知できない状況に至っていたし、借財の増加で上方の豪商からの借銀も不可能な窮地にあったのである。それに加えて巡見使下向という事態を迎えて、預り手形の発行に踏み切らざるを得なかったのだとみてもよからう。

3. 米穀購入の失敗と札遣いの停止

「藩庁日記」天保8年（1837）11月11日の条に、

格段御趣意ニ而御買占方等被差出候処、不埒之者有之処より、売米不

足、御趣意崩ニ相成、甚不屈之儀ニ付、精々見聞方之儀、役筋江被仰付、
右体不埒無之様被仰付様（下略）、

とあり、嚴重な規則をなお犯す者が跳梁^{ちやうりやう}して、「売出米不足」に追い込まれ、このままでは預り手形発行に関する「御趣意」が崩壊してしまうという、正に根本的な失敗が懸念される事態に至ったことが知られる。それに加えて、同前天保9年4月晦日の条によると、天保8年の「作柄」が悪くて、買い占め可能な米穀が出回ることがなく、そのために失敗に至ったとされている。前述のように違反者による不法行為で売出米の不足状況が惹起されたのに加えて、天保8年の不作が米の買い占めに決定的に不利に働き、弘前藩の預り手形による米買い占め策は崩壊したのであった。

上記の状況を段階的に見ていくと、天保8年11月には、札遣いを開始して1か月が経過した時期にあって、すでに札が安価で売買されていて、他方ではそれを利用して安値で札を買い占めて一儲けを企てる族も現れた。つまり宮崎札の札価が急激に凋落していったのであり、札の購買力の低下は著しいものであったという。次には、札自体の通用が困難となり、逆に米や大豆・油など、札による購入しか認められていない物は価格が高騰し、藩庁でも公定価格を上げざるを得ず、領内経済の混乱は究極に達したのである。さらに贋札の登場により、札遣いの混乱が加速したともいわれる。同札は体裁の簡単な札であったことから、贋札の製造は比較的容易であったと推測される。

さてこのように領内経済に混乱を来した宮崎札は、天保9年4月25日、ついに通用の停止が藩庁より指令された。「藩庁日記」同日の条には、

一、去冬より御領内限通用之宮崎八十吉預手形之儀、当分御見合被仰付候、
尤引替等之儀者追而御沙汰被仰付候間、心得違御扱之儀不申出候様被仰
付候、（下略）

とあり、預り手形は、「当分御見合」と通用が停止されたのである。それならば藩庁は、本来、人々の手元に残った預り手形と正金銭とを交換する義務を負うはずであるのに、上の記事によれば、それは当分の期間実施しないと明言されている。そもそも宮崎札については、当初より通用規定らしきことは明確にされておらず、換金する期日や引き換えの方法なども定められていなかった。また札そのものにも、引き換え期限などは明示されていない（実物複写を参照のこと）。

このことから弘前藩では、藩庁にも宮崎札の通用にどれほどの熱意があったのか疑わしい側面もあり、領内米穀の買い占め、買い上げ米の領外移出による正金銭の獲得の目的が徹底されたとしても、あるいは預り手形を換金する意図は発行当初よりもっていなかった可能性も考えられる。このように札と正金銭の交換を無期限に延期することを宣言したのは、不作のために米穀買い占めが頓挫して、それらの政策が失敗に帰したことから、宮崎札の通用が決定的に行き詰まったことを示唆しており、弘前藩ではこのたびの藩札の発行と通用も失敗に終わったのであった。

宮崎札の通用失敗の影響は、意外に小さかったのではないかとされている。その理由として、第一に札自体の発行がきわめて少なく、したがって藩庁が買い占めることができた米穀が少なかったことから、残札も多かったという。そのため経済・流通に与えた混乱は、最小限に食い止められた。第二に札遣いの期間が短期間であった。第三に米穀買い占めの主たる対象となったのは藩士達の知行米であったので、預り手形の大部分は彼らの手元に残ったから、引き換えの無期限延期によって最大の被害を被ったのは、商人・農民などではなく、実は家臣団であったのである。この点でも領内の経済・流通構造に預り手形の混乱が及ぼした影響は、限定的なものにとどまった。逆

に藩士財政の窮乏は著しいものになったと推測され、彼らの不満は当然のごとく、一連の経済政策を策定し実施に責任を負っていた田中勝衛と三浦健蔵の両名へ向けられた。「藩庁日記」天保9年（1838）4月3日の条によれば、田中・三浦両名は、賄賂を受け取り、驕奢の振舞があり、不届きの至りであるから、役目召し放ち、家屋敷取り上げ等の処罰に処する旨が大目付より令達された。経済政策の失敗による処罰ではなく、彼らの私行を問題とし、私利私欲を糾弾するという次元での処分であった。これは藩政運営の失敗を個人レベルの問題にすり換えたに過ぎず、幕藩体制下の各大名領内の藩政ではよく見られることであった。預り札通用の失敗は、弘前藩の経済見通しの甘さと経済・流通政策の失敗によるものであり、正に起きるべくして起こったといえよう。

4. 宮崎札の形態について

宮崎札については、五所川原市歴史民俗資料館所蔵平山家文書に収められている、1文目、2文目、3文目、5文目、7文目、10文目、20文目、28文目、5分札の実物を複写したものを、次ページ以下、1ページごとに各札の表面と裏面に並べて掲げた。

◆ 1 文目の宮崎札 (154mm×53mm)



表



裏

◆ 2 文目の宮崎札 (155mm×54mm)



表



裏

◆ 3 文目の宮崎札 (153mm×52mm)



表



裏

◆ 5 文目の宮崎札 (156mm×54mm)



表



裏

◆ 7 文目の宮崎札 (155mm×54mm)



表



裏

◆10文目の宮崎札(154mm×53mm)



表



裏

◆20文目の宮崎札 (153mm×53mm)



表



裏

◆28文目の宮崎札 (156mm×59mm)



表

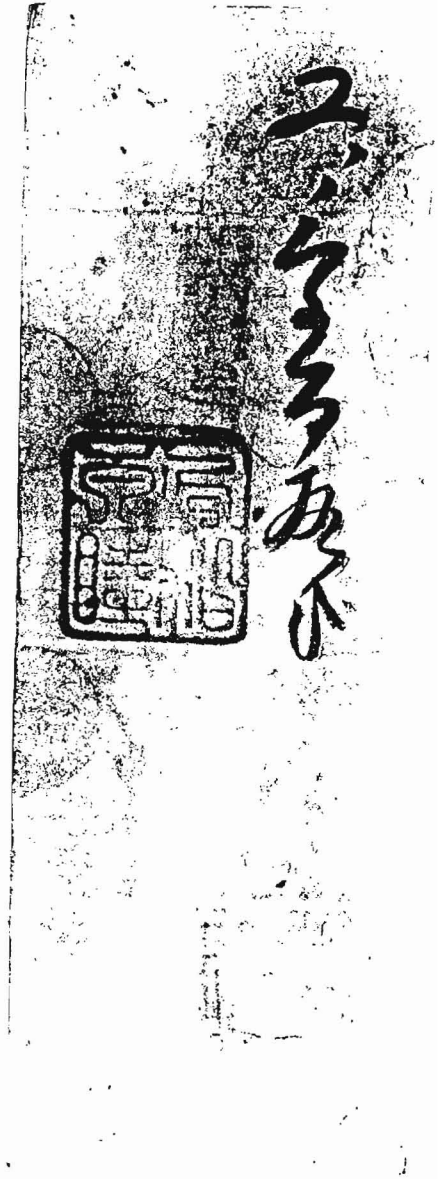


裏

◆ 5 分の宮崎札 (154mm×54mm)



表



裏